YAMAHA commercial audio

M7CL
クイックスタートガイド

A guide for people using M7CL in the real world.

Part 2

Part 2 ではバーチャルラック、外部ヘッドアンプ接続や Editor の接続など、一歩進んだ活用法について解説します。またシーンの使用方法、モニター出力のパッチング、出力ポートのディレイ設定などについても解説します。

このクイックスタートガイドは、ヤマハデジタルミキシングコンソール M7CL に初めて触れるユーザーの皆様を対象読者としております。したがって、本ガイドはオーディオミキシングについて詳しく解説したものではありません。より詳しい情報をお求めの方は、製品に付属の取扱説明書をご覧ください。
ほとんどの機能を M7CL 本体のタッチスクリーンから直感的に操作できますが、十分にご試用されてから、実際の現場でお使いください。

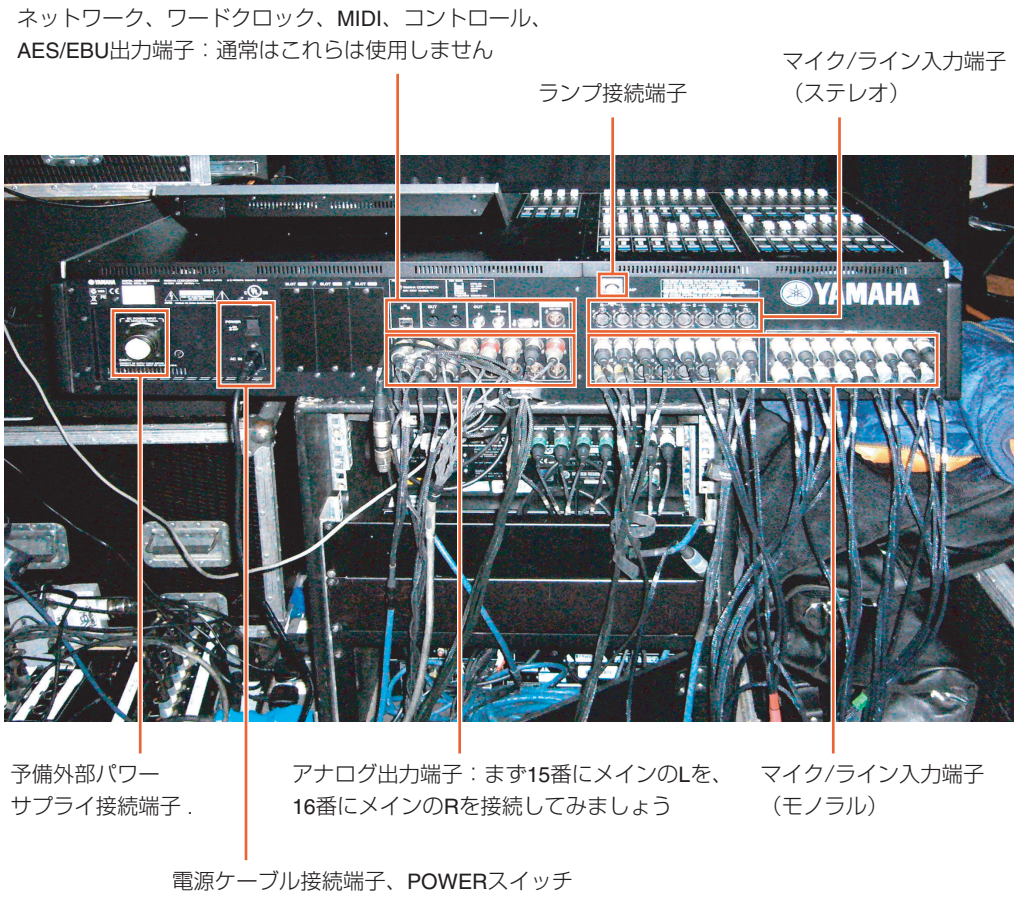
「分厚いマニュアルはちょっと･･･」
「手っ取り早く使ってみたい！」
という方は、まずこのガイドをご覧ください。

目次

M7CL を接続しましょう ー 接続の実例 3
コンソールの準備 3
バーチャルラック（エフェクト /GEQ）を活用する 4
バーチャルラックにエフェクトをマウント（設置）する 4
エフェクトを選択 / 編集 / 保存する 5
エフェクト /GEQ をチャンネルにアサインする 6
GEQ を選択 / 編集する 7
GEQ 設定をコピー / ペースト / コンペア / 保存する 8
外部ヘッドアンプ（YAMAHA AD8HR）を接続 / コントロールする 9
外部ヘッドアンプを接続する 9
外部ヘッドアンプをコントロールする 10
Studio Manager/M7CL Editor を接続する 11
M7CL とコンピューターを接続する 11
ネットワーク設定をする 12
Studio Manager/M7CL Editor を起動 / 設定する 13
MONITOR セクションについて ー CUE ボタン、モニター出力の割り当て 14
リアパネルについて ー 接続と出力ポートディレイ 15
シーンを使用する 16
シーンを保存する / 呼び出す 16
シーンについて 17
リコールセーフ機能 18
ユーザー定義キーの割り当て 19
トラブルシューティング 20

© 2006 YAMAHA CORPORATION All rights reserved.

M7CL を接続しましょう ー 接続の実例

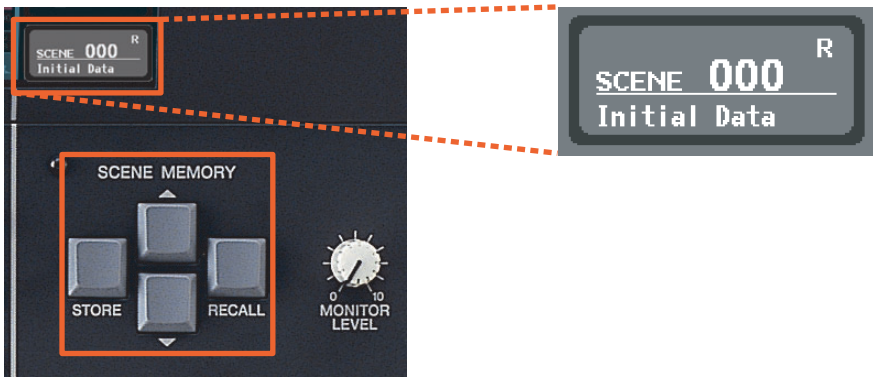


上記は接続例です。
よりきれいな接続を！

コンソールの準備

アナログコンソールでは、作業前にコンソールが初期状態に戻っているか確認する必要がありました。1000以上もあるノブを操作して、「ゲインを最小に」、「EQをフラットに」等、初期状態に戻すには大変な労力と時間が必要です。しかしM7CLではこれらのセッティングをシーンとして記憶しています。初期状態のセッティングもあらかじめ「シーン000」として記憶されていますので、必要なキーを押すだけでコンソールを初期状態に戻すことが可能です。

シーン000を呼び出すには、SCENEフィールドに「SCENE 000」と表示されるまでSCENE MEMORY[▲]/[▼]キーを押します。SCENEフィールドに「SCENE 000」と表示されたら、SCENE MEMORY [RECALL]キーを押します。

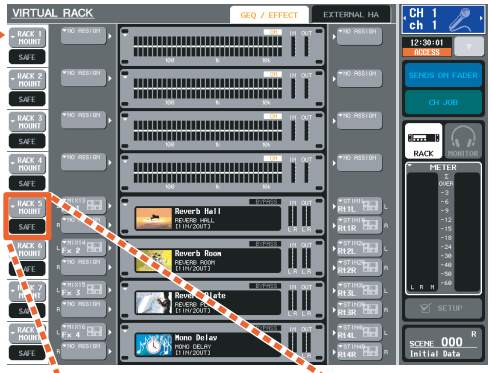


バーチャルラック（エフェクト /GEQ）を活用する：バーチャルラックにエフェクトをマウント（設置）する

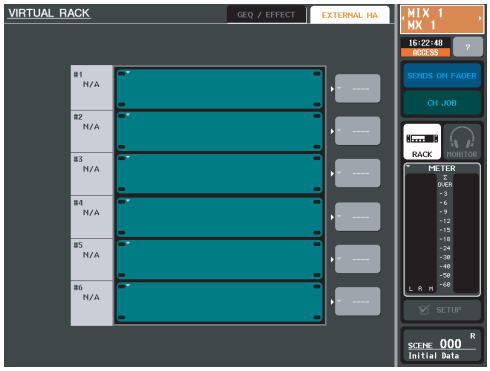
M7CLは８つのバーチャルラックを装備しています。ラック１～４には31バンドのGEQを、ラック５～８にはGEQまたはSPXタイプのマルチエフェクトをマウント（設置）して使用できます。ひとつのラックには31バンドを自由に操作できる31BandGEQをひとつか、31バンドのうち任意の15バンドを操作できるFlex15GEQをふたつのいずれかが使用できます。

ファンクションアクセスエリア内の[RACK]ボタンを押して、内蔵バーチャルエフェクトラックにアクセスしましょう。画面上部の[GEQ/EFFECT]タブと[EXTERNAL HA]タブを使用して画面を切り替えます。

下記はVIRTUAL RACK GEQ/EFFECT画面です。GEQやエフェクトの選択、コントロールに使用します。



下記はVIRTUAL RACK EXTERNAL HA画面です。外部ヘッドアンプ（YAMAHA AD8HR）のコントロールに使用します。



[RACK MOUNT]ボタンを押して、RACK MOUNTERポップアップウィンドウを開きます。

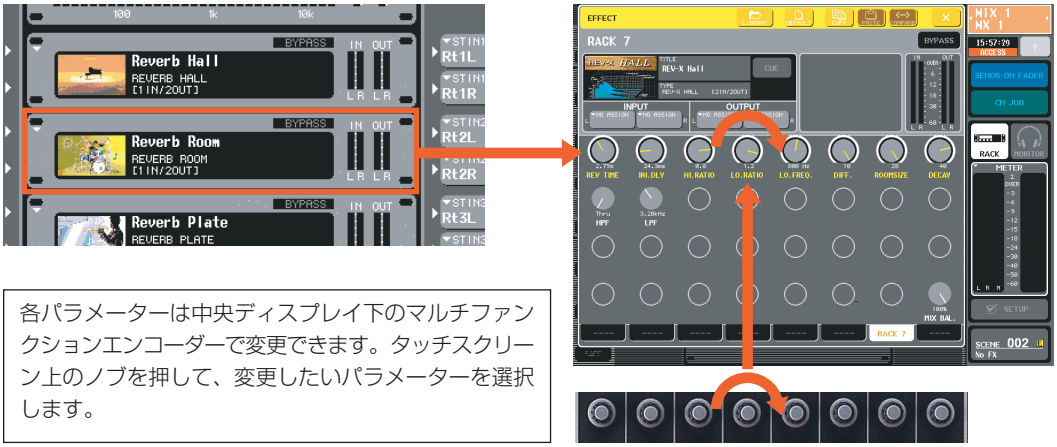
RACK MOUNTERポップアップウィンドウ内のボタンを使って、[BLANK]、[31BandGEQ]、[Flex15GEQ]、[EFFECT]の中から使いたいユニットを選択します。選択したら[OK]ボタンを押してエフェクト/GEQをマウントします。[X]を押すと、ユニットをマウントせずにポップアップウィンドウが閉じます。

シーン000では４つのエフェクトと４つのGEQがすでに選択されています。M7CLでは、常に８つのバーチャルエフェクトラックが装備されていることになります（いくつかのラックは空の状態の場合があります）。

エフェクトはラック５～８にのみマウントが可能です。GEQはすべてのラックにマウントが可能です。GEQは31BandGEQまたはFlex15GEQのどちらかを使用できます。ラックにマウントするユニットを変更するには、[RACK MOUNT] ボタンを押します。[RACK MOUNT] ボタンを押すと、選択したユニットのRACK MOUNTER ポップアップウィンドウが開きます。

バーチャルラック（エフェクト /GEQ）を活用する：エフェクトを選択 / 編集 / 保存する

VIRTUAL RACK GEQ/EFFECT 画面でエフェクトがマウントされているラックの中央部分を押すと、EFFECT ポップアップウィンドウが開きます。



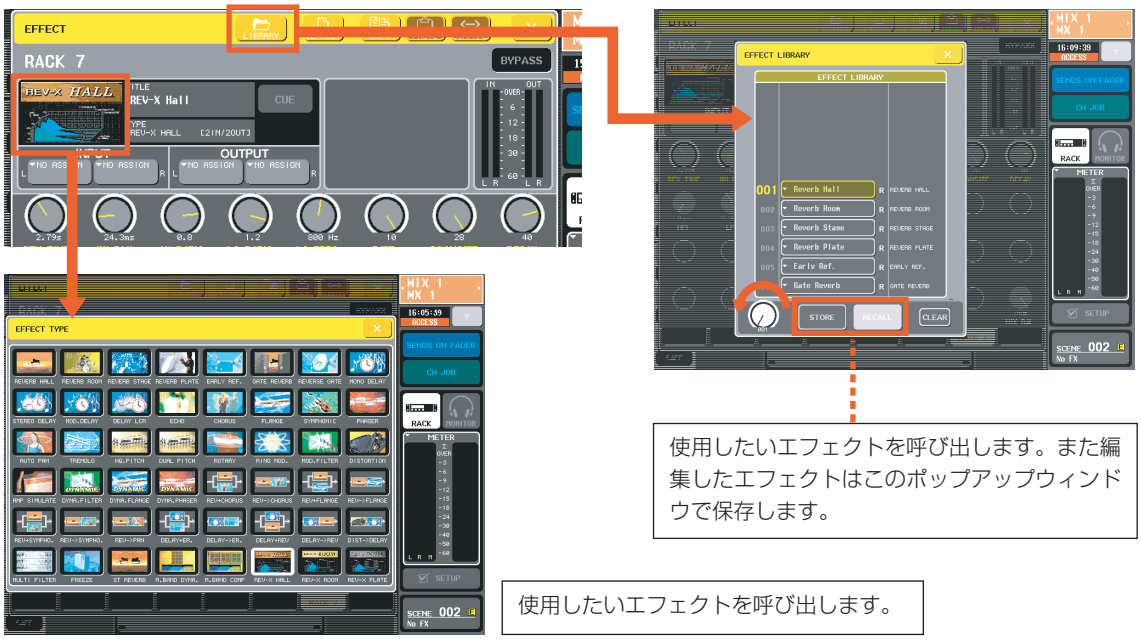
各パラメーターは中央ディスプレイ下のマルチファンクションエンコーダーで変更できます。タッチスクリーン上のノブを押して、変更したいパラメーターを選択します。

エフェクトタイプを変更する方法は２通りあります；

1） エフェクトイメージを押して、EFFECT TYPE ポップアップウィンドウを開きます。開いたポップアップウィンドウ内のエフェクトイメージを押すと、エフェクトタイプを変更できます。

2） EFFECT ポップアップウィンドウ上部の [LIBRARY] ボタンを押して、EFFECT LIBRARY ポップアップウィンドウを開きます。開いたポップアップウィンドウ内のエフェクトリストから、変更したいエフェクトタイプを選択します。エフェクトリストはマルチファンクションエンコーダーでスクロールできます。

[LIBRARY]ボタンまたはエフェクトイメージを押します。



使用したいエフェクトを呼び出します。また編集したエフェクトはこのポップアップウィンドウで保存します。

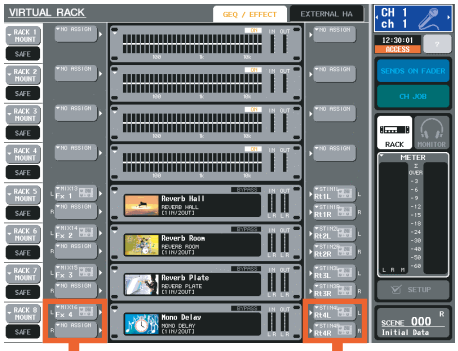
使用したいエフェクトを呼び出します。

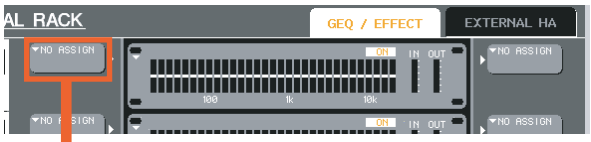
編集したエフェクトはライブラリー 058～199 に保存できます。ライブラリー 001～057 は読み込み専用のライブラリーです。Rev-X リバーブはライブラリー 046～048 から呼び出すことができます。

バーチャルラック（エフェクト /GEQ）を活用する：エフェクト /GEQ をチャンネルにアサインする

シーン 000 では、MIX チャンネル 13 ～ 16 がエフェクトセンド、STEREO 入力チャンネル 1 ～ 4 がエフェクトリターンとして割り当てられています。これらのパッチは自由に変更できます。

M7CL の GEQ は、INPUT、MIX、MATRIX、MASTER チャンネルのインサートイン / アウトに割り当てることができます。またエフェクトは、MIX、MATRIX、MASTER チャンネル出力またはインサートアウトに割り当てることができます。





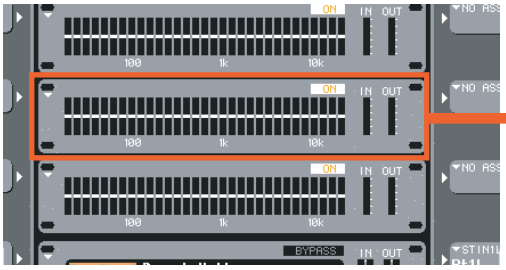
エフェクトについては、エフェクトリターンをチャンネルに割り当てる必要があります。シーン 000 では、STEREO 入力チャンネル 1 ～ 4 に割り当てられていますが、変更が可能です。エフェクトラック右側のボタンを押して INPUT CH SELECT ポップアップウィンドウを開くか、OVERVIEW 画面から PATCH/NAME ポップアップウィンドウを開いて、エフェクトリターンのパッチを変更します。

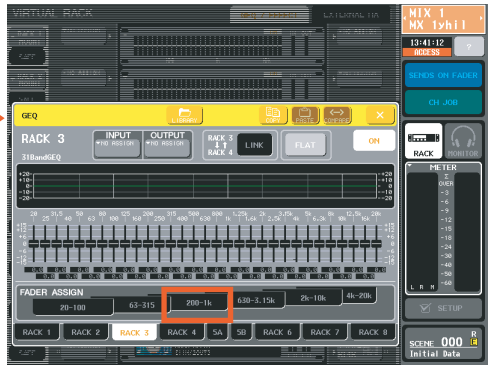
これらのポップアップウィンドウからチャンネルにエフェクトを割り当てます。

エフェクトリターンを STEREO 入力チャンネル以外に割り当てた場合でも、元の STEREO 入力チャンネルへの割り当ては解除されていません。別途 STEREO 入力チャンネルの割り当てを解除するか、別のヘッドアンプに割り当てを変更する必要があります。

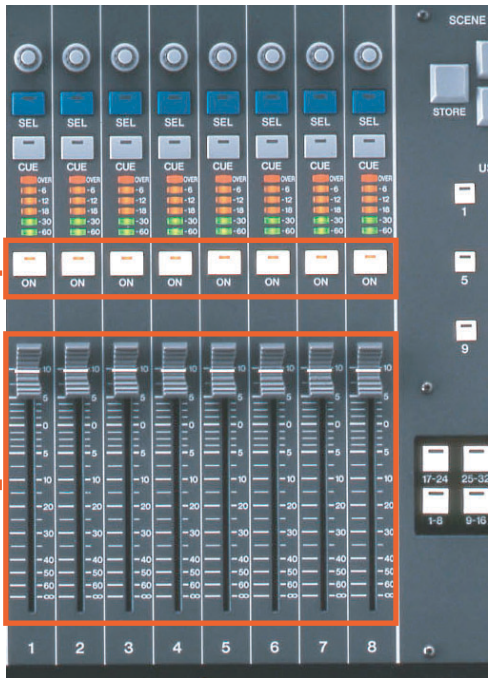
バーチャルラック（エフェクト /GEQ）を活用する：GEQ を選択 / 編集する

VIRTUAL RACK GEQ/EFFECT 画面で GEQ マウントされているラックの中央部分を押すと、GEQ ポップアップウィンドウが開きます。

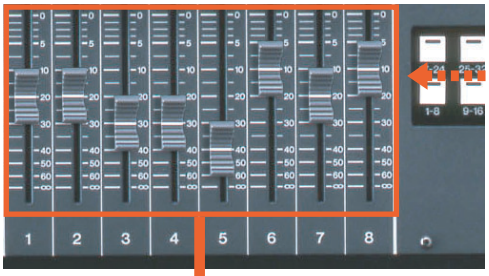


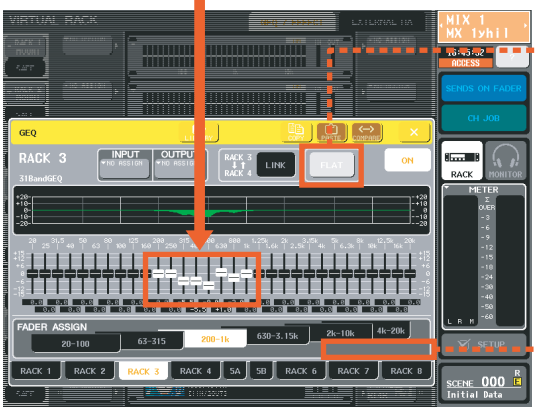


GEQポップアップウィンドウで編集したい周波数帯域（この例では[200-1k]）をGEQイメージ下のFADER ACTIONエリア内のタブを押して選択します。選択したタブは反転して白くなり、またCentralogic™セクションのフェーダーが選んだ帯域に合わせて動きます。フェーダーを動かすことにより、GEQカーブを編集できます。違う帯域を編集したい場合は、その帯域のタブを押します。



フェーダー上の[ON]キーを押すと、個々の周波数帯域が0dBに戻ります。



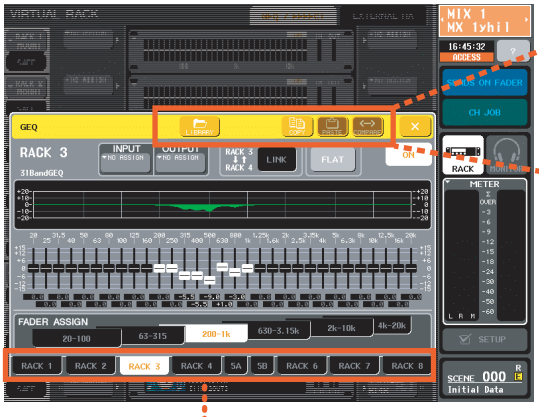


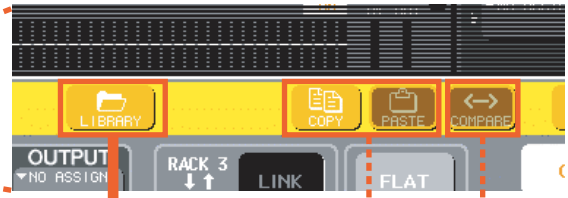
[FLAT]ボタンを押すと、すべてのEQをフラットにします。

ポップアップウィンドウ下部のタブを押すと、別のGEQに切り替えて編集できます。同様にFlex15GEQも選択/編集できます。Flex15GEQを編集する場合には、編集可能な残りバンド数が表示されます（AVAILABLE BANDS）。

バーチャルラック（エフェクト /GEQ）を活用する：GEQ 設定をコピー / ペースト / コンペア / 保存する

GEQ ポップアップウィンドウ上部には [COPY]、[PASTE]、[COMPARE]、[LIBRARY] ボタンがあります。



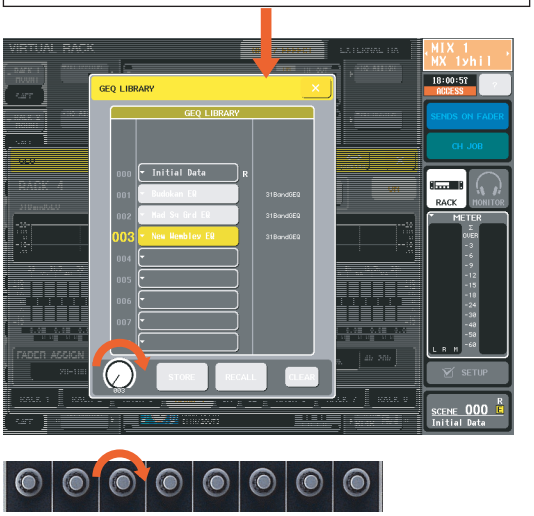


ポップアップウィンドウ下部の[RACK]タブを押すと、別のGEQに切り替えて編集できます。

[COPY]ボタンを押すと、表示されているGEQカーブがコピーされ、バッファーメモリーに一時的に保管されます。他のGEQを選択して[PASTE]ボタンを押すと、コピーされたGEQカーブがペーストされます。

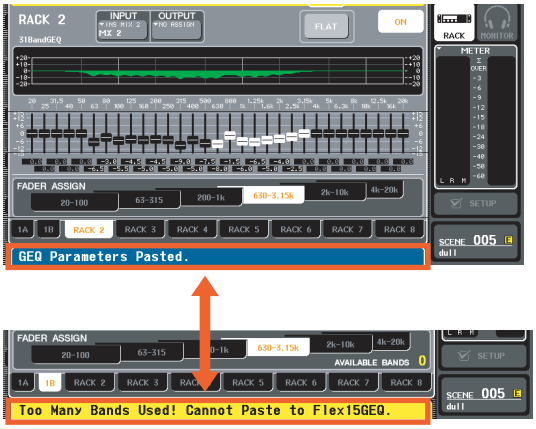
GEQカーブを保存する/呼び出すには[LIBRARY]ボタンを押してGEQ LIBRARYポップアップウィンドウを開きます。

GEQカーブをバッファーメモリーにコピーしたあとで、そのGEQカーブを変更すると、[COMPARE]ボタンで変更前（バッファーメモリーにコピーされた内容）と変更後（現在の内容）のGEQカーブを切り替えて比較できます。



中央ディスプレイ下のマルチファンクションエンコーダーを使用して、保存する/呼び出すライブラリー番号を選択します。ライブラリー番号を選択したら、[RECALL]または[STORE]ボタンを押します。

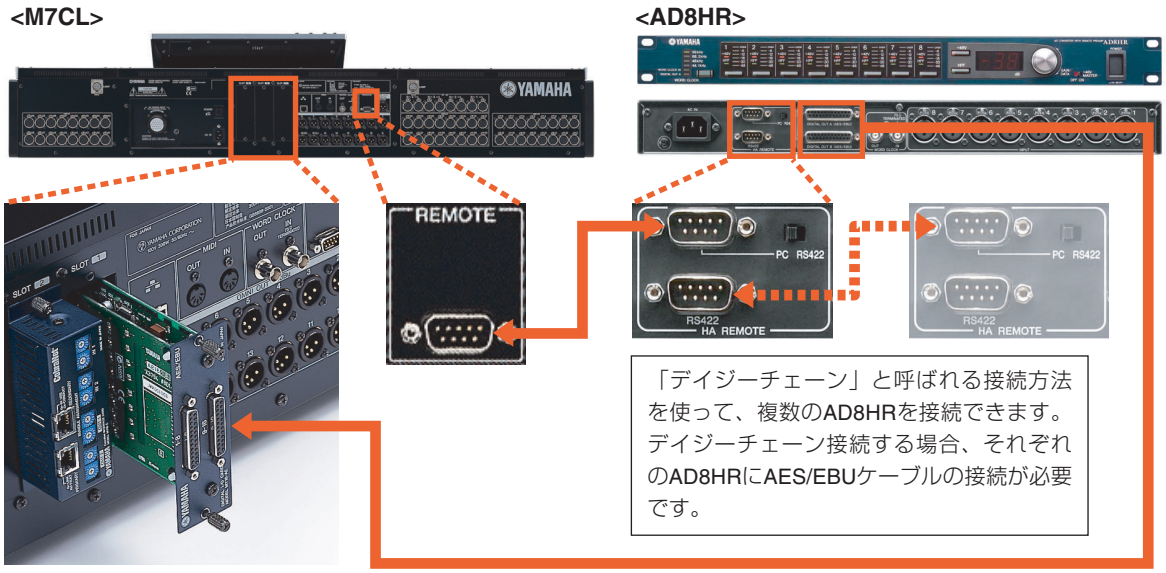
31BandGEQ にはすべての GEQ カーブをペーストできますが、Flex15GEQ にペーストできるバンド数は 15 以下となります。



外部ヘッドアンプ（YAMAHA AD8HR）を接続 / コントロールする：外部ヘッドアンプを接続する

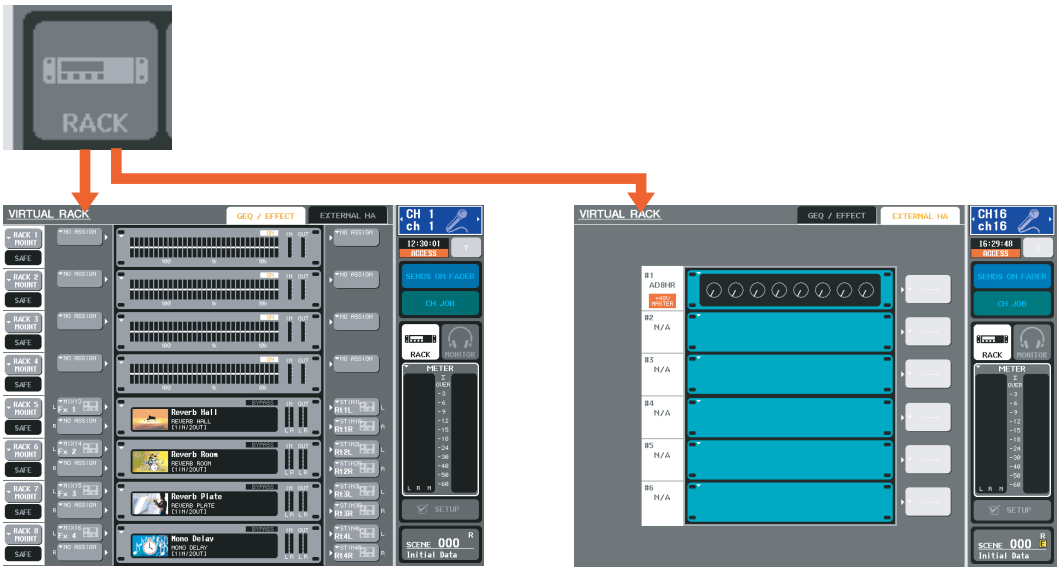
M7CL にヤマハ製リモートヘッドアンプ /AD コンバーター AD8HR を接続して使用できます。接続にはデジタルオーディオ信号の受信用に Mini YGDAI カード（AES/EBU フォーマット対応）が必要です。

Mini YGDAI カードを取り付ける前に、M7CL の電源をオフにしてください。オーディオケーブルとコントロールケーブルの両方を接続します（ピンアサインについては取扱説明書をご参照ください）。M7CL の電源をオンにすると、カードが検知されます。



M7CLはmLANを除くすべてのMini YGDAIカードに対応しています。AD8HRからのデジタルオーディオ信号（AES/EBUフォーマット）を受信するには、下記のいずれかのカードが必要です：MY8-AE、MY8-AE96、MY8-AE96S、MY16-AE（2台のAD8HRが接続可能）。

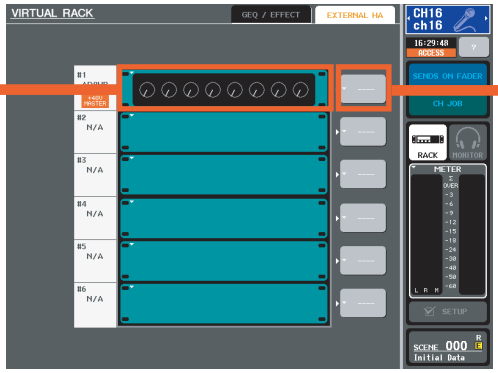
ファンクションアクセスエリア内の [RACK] ボタンを押して、内蔵バーチャルエフェクトラックにアクセスしましょう。画面上部の [GEQ/EFFECT] タブと [EXTERNAL HA] タブを使用して画面を切り替えます。



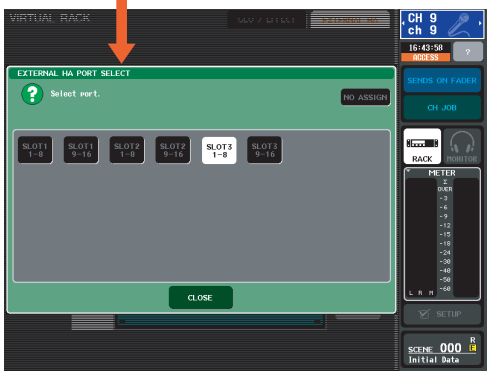
AD8HR が接続されている場合、VIRTUAL EFFECT EXTERNAL HA 画面に AD8HR のノブイメージが表示されます。AD8HR 側でファンタムマスター電源がオンになっている場合、[+48V MASTER] インジケーターが赤く点灯します。AD8HR のファンタムマスター電源は、M7CL 本体の [+48V MASTER ON/OFF] ボタンではなく、AD8HR 本体側でオン / オフします。

外部ヘッドアンプ（YAMAHA AD8HR）を接続 / コントロールする：外部ヘッドアンプをコントロールする

ユニットイメージを押すと、EXTERNAL HAポップアップウィンドウが開き、AD8HRのHPFを設定できます。ゲイン量もこのポップアップウィンドウで調整できますが、入力チャンネルに外部ヘッドアンプを割り当てている場合は、その入力チャンネルからも外部ヘッドアンプのゲイン量またはファンタム電源のオン/オフを設定できます。



ユニットイメージ右のボタンを押すと、EXTERNAL HA PORT SELECTポップアップウィンドウが開きます。



AD8HRを接続するスロットとチャンネルを指定します。

外部ヘッドアンプを入力チャンネルに割り当てるには、割り当てたいチャンネルのOVERVIEW画面またはSELECTED CHANNEL VIEW画面を中央スクリーンに表示させます。

これらの画面からPATCH/NAMEポップアップウィンドウを開きます。PORT SELECTエリア内のSLOTタブを押してスロット番号を指定し、外部ヘッドアンプを入力チャンネルに割り当てます。

次のチャンネルに移動するには、タッチスクリーン右上の選択チャンネル表示またはトップパネルの[SEL]キーを押します。

PATCH/NAMEポップアップウィンドウのICONまたはNAMEページが開いている場合は、ポップアップウィンドウ下部の[PATCH]タブを押してPATCHページに切り替えます。

これで入力チャンネルのHAエンコーダーでAD8HRをコントロールできます。またパネルLEDの輝度を調節すると、AD8HRのLEDにも反映されます。

Studio Manager/M7CL Editor を接続する：M7CL とコンピューターを接続する

M7CL のシーンメモリーやライブラリーは、M7CL Editor がインストールされているコンピューターで編集 / 保存できます。コンピューターと M7CL は ETHERNET 端子経由でリンク可能で、データ転送 / 同期も可能です。これにより、コンピューターを M7CL のリモートコントローラーのように使用できます。

ソフトウェア

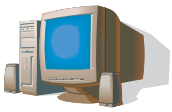
最新のソフトウェア（無償）を下記ウェブサイトから入手してください；

http://proaudio.yamaha.co.jp/download/index.html

ハードウェア

コンピューターのシステム要件は下記のとおりです；

- Windows XP（Home または Professional）
- 800MHz 以上の Intel Pentium および Celeron ファミリーのプロセッサー搭載
- 256MB 以上のメモリー
- 30MB 以上の空き容量があるハードディスク
- 1024 × 768 ドット以上、High Color 以上のディスプレイ

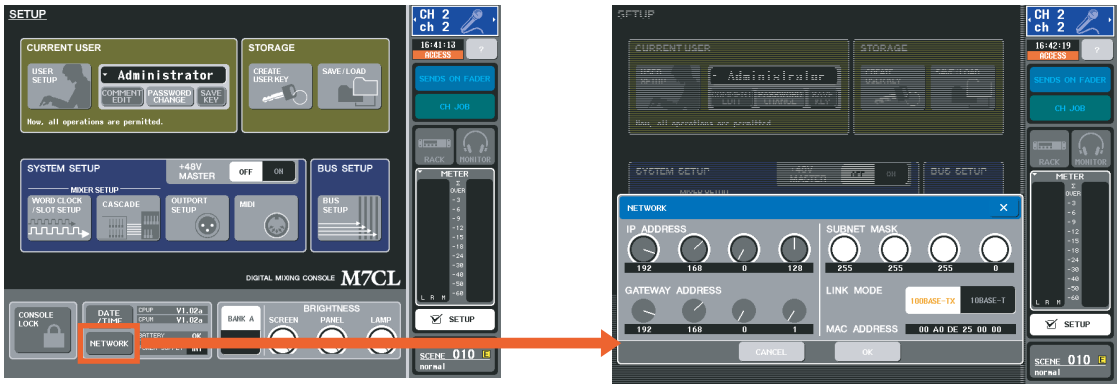


下記のソフトウェア / ドライバーをダウンロードする必要があります；

1) Studio Manager Host ソフトウェア
2) M7CL Editor ソフトウェア
3) DME-N ネットワークドライバー

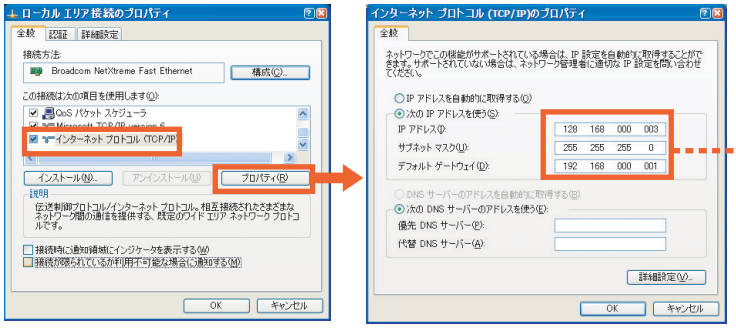
画面の表示にしたがってこれらのソフトウェア / ドライバーをインストールしてください。

SETUP ページから NETWORK ポップアップウィンドウを開きます。このページでは IP ADDRESS、GATEWAY ADDRESS、SUBNET MASK、MAC ADDRESS が表示されます。対応している IP アドレスはクラス C（最初の 3 桁の数字が 192 ～ 223 のもの）のみですのでご注意ください。



Studio Manager/M7CL Editor を接続する：ネットワーク設定をする

接続したコンピューターのインターネットプロトコル（TCP/IP）を下記の手順で設定します；
スタートメニューから、[設定] > [コントロールパネル] > [ネットワーク接続] > [ローカルエリア接続] > [プロパティ] の順で選択していきます。[ローカルエリア接続のプロパティ] ボックスで、[インターネットプロトコル（TCP/IP）] をリストから選択し、[プロパティ] ボタンを押します。



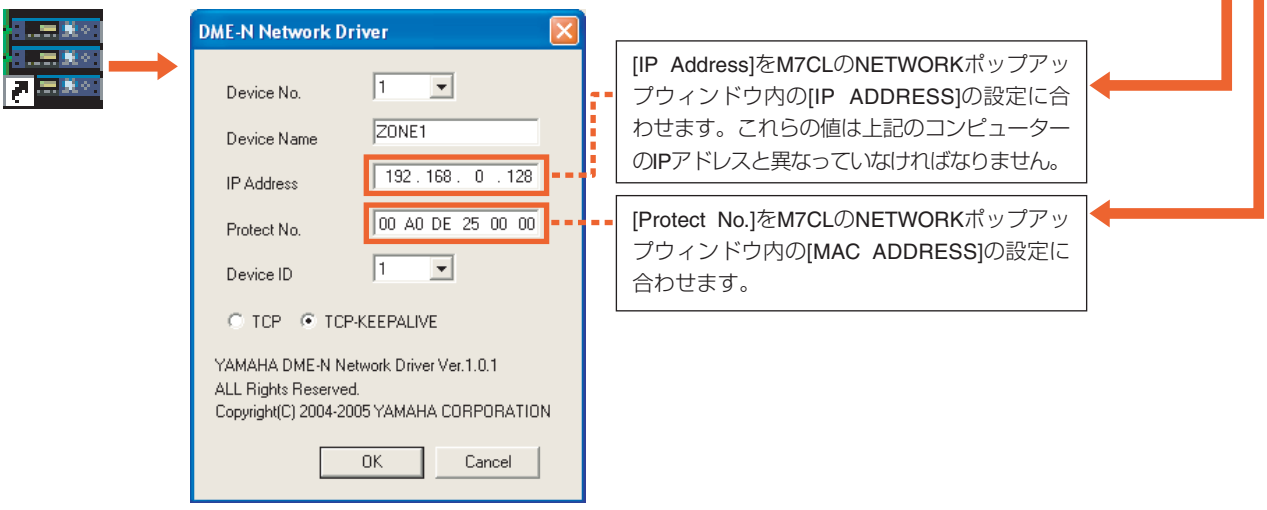
IPアドレス；最初の3セットの3桁の数字はM7CL側の設定に合わせます。最後の3桁の数字は別の数字にします。
例：192.168.000.003（または192.168.0.3）

サブネットマスク；「255.255.255.000」に設定してください。

デフォルトゲートウェイ；別のネットワークに接続する場合に使用します。通常はデフォルト設定のままご使用ください。

M7CL 側のネットワーク設定を、下記の NETWORK ポップアップウィンドウに示されているように設定してください。

次に DME-N ネットワークドライバーを下記の手順で設定します（このドライバーは、当初ヤマハデジタルミキシングエンジン DME シリーズ用に開発されたため、「DME」という名称がついています。）；
スタートメニューから、[設定] > [コントロールパネル] > [DME-N Network Driver] の順で選択していきます。



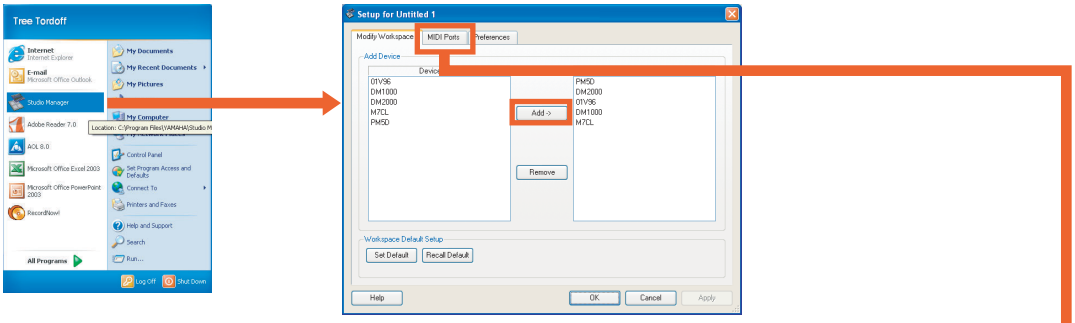
[IP Address]をM7CLのNETWORKポップアップウィンドウ内の[IP ADDRESS]の設定に合わせます。これらの値は上記のコンピューターのIPアドレスと異なっていなければなりません。

[Protect No.]をM7CLのNETWORKポップアップウィンドウ内の[MAC ADDRESS]の設定に合わせます。

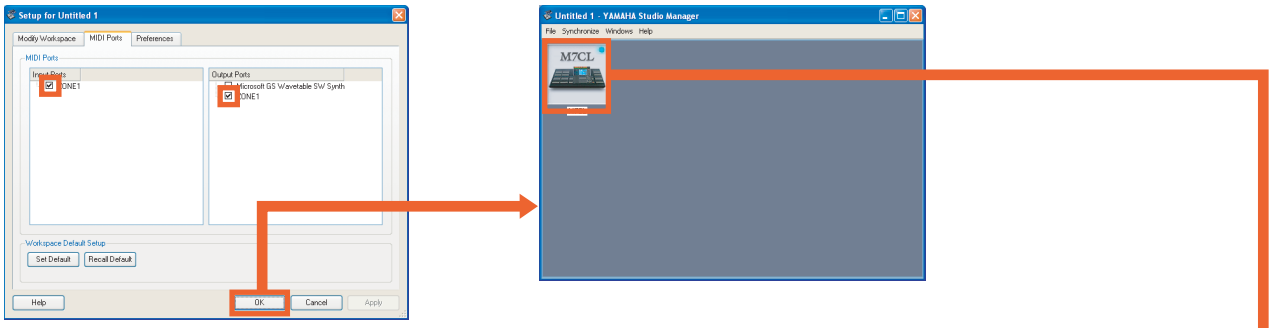
ドライバーとIPアドレスの設定が終了したら、[OK] ボタンをクリックします。

Studio Manager/M7CL Editor を接続する：
Studio Manager/M7CL Editor を起動 / 設定する

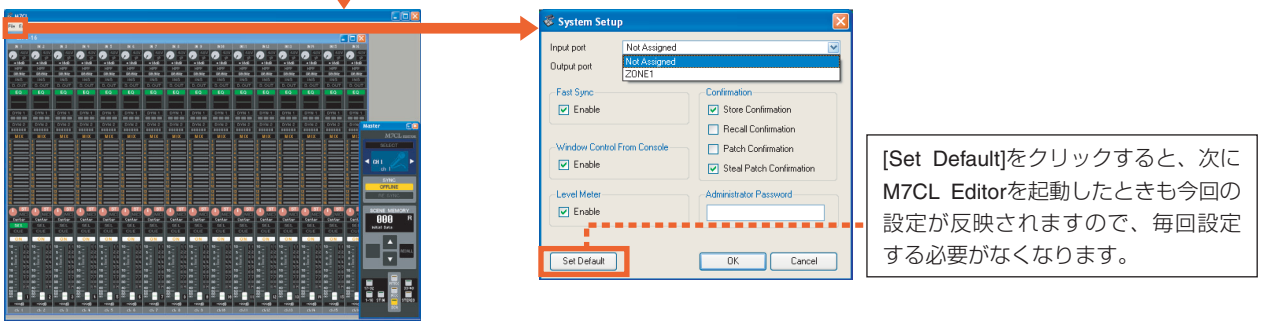
プログラムメニューまたはショートカットからYAMAHA Studio Managerを起動します。Studio Managerの[File]メニューから[Setup]を選択します。開いたウィンドウの左側のリストから「M7CL」を選択し、[Add]ボタンを押します。右側のリストに「M7CL」が追加されたことを確認してください。



次にタブをクリックしてMIDI Portsウィンドウを開きます。使用しているポート（ZONE 1）にチェックを入れます。[OK]ボタンをクリックすると、M7CLアイコンがStudio Managerウィンドウに表示されます。M7CLアイコンをダブルクリックして、M7CL Editorを起動します。



M7CL Editorが起動したら、[File]メニューから[System Setup]を選択します。開いたウィンドウで通信に使用するポートを選択します。ポートはInput Port、Output PortともにStudio Managerで選択したポート（ZONE 1）に合わせます。M7CL本体にAdministratorパスワードが設定されている場合は、[Administration Password]欄に入力します。設定が終了したら[OK]ボタンをクリックし、ウィンドウを閉じます。



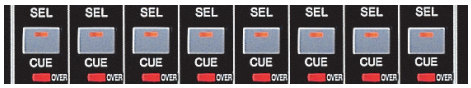
[Set Default]をクリックすると、次にM7CL Editorを起動したときも今回の設定が反映されますので、毎回設定する必要がなくなります。

M7CLとコンピューターが正しく接続されると、[ONLINE]インジケーターが緑色に点灯します。この状態のとき、M7CLとM7CL Editorのパラメーターが同期し、パラメーターを変更すると互いに反映されます。

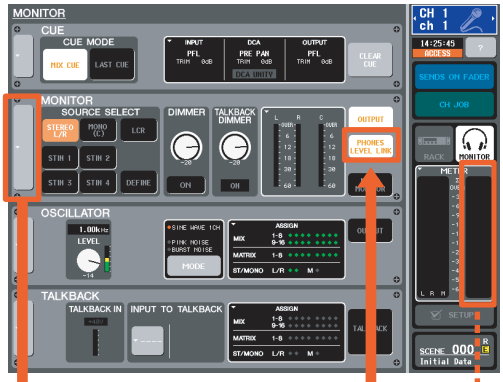
[RE SYNC]ボタンを押すと、M7CLとコンピューター上の設定を同期させることができます。同期する場合には、どちらの設定をどちらの設定に反映させるかをよく確認してください（[Re Synchronize]ウィンドウ内の[Direction]で設定できます）。この設定を間違えると、大切なデータを損失する可能性があります。M7CLをコンピューター上の設定に同期させることは、まったく新しいデータを既存のデータに上書きするのと同じことです！

MONITOR セクションについて ー CUE ボタン、モニター出力の割り当て

チャンネルのキュー機能をオンにすると、オーディオ信号がCUEバスに送られ、ファンクションアクセスエリア内のCUEメーターで各チャンネルのレベルを確認できます。キュー信号はフロントパネル下のヘッドホン出力端子に送られます。モニター機能の設定を変更するには、ファンクションアクセスエリア内の[MONITOR]ボタンを押してください。



キュー操作とチャンネル選択の操作を連動させる場合は、SETUPページからUSER SETUPポップアップウィンドウを開き、[CUE]→[SEL] LINKをオンにします。



デフォルトでは、STEREO L/Rチャンネルの信号出力がモニターソースとして設定されています。そしてSTEREO L/Rチャンネルの出力信号は、フロントパネル下のヘッドホン出力端子に出力されます。ただしキュー機能をオンにすると、ヘッドホン出力端子からは、常にキュー信号が出力されるようになります。

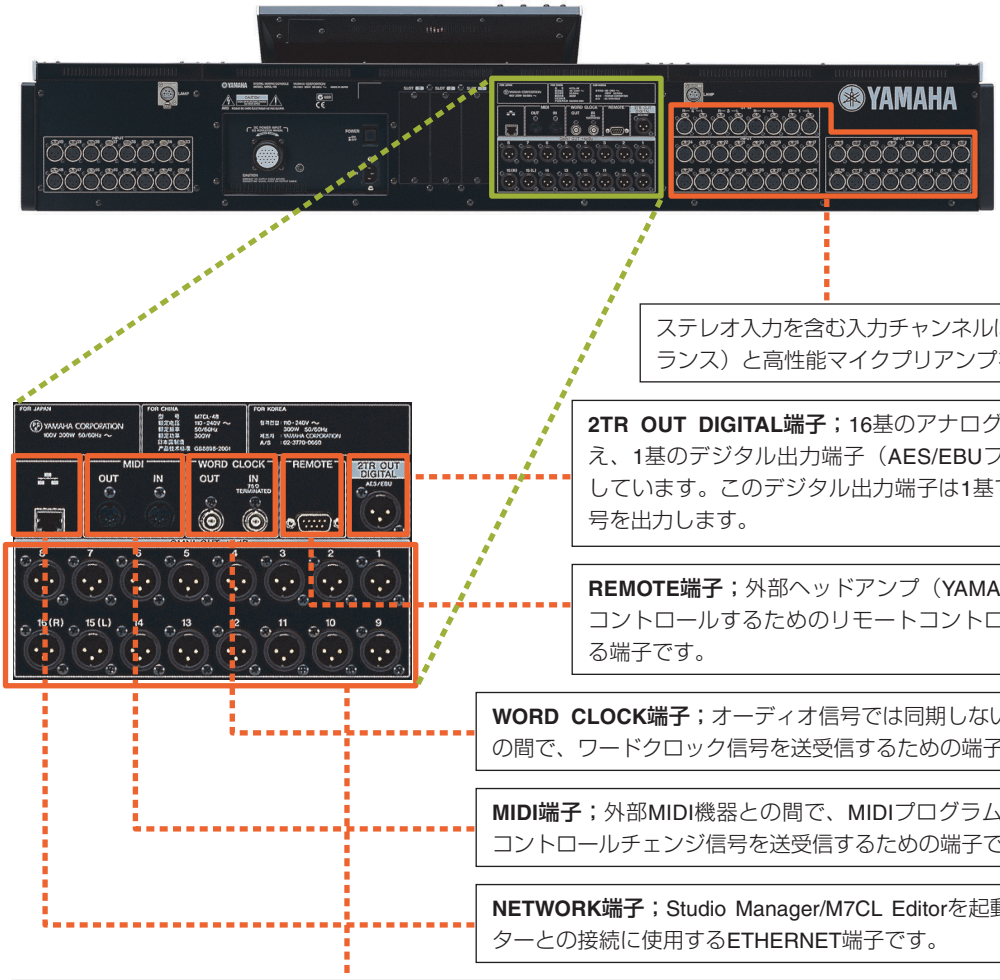
キューを解除するにはCUEメーター部分を押します。

MONITORセクションのSOURCE SELECTボタンで、STEREO L/Rチャンネルの信号出力以外の出力をモニターソースとして選択できます。またST IN端子の入力信号をモニターソースとして選択することも可能です。

PHONES LEVEL LINKボタンを押すと、ヘッドホン出力端子へ送る信号のレベルをトップパネルのMONITOR LEVELノブで調節できます。両者のリンクは外すことができ、これはモニターミックスに有効です。

モニター信号はヘッドホン出力だけでなく、リアパネルのOMNI OUT端子に送ることもできます。
MONITORポップアップウィンドウからOUTPUT PORT SELECTポップアップウィンドウを開いて、モニター信号を出力する端子を割り当てます。

リアパネルについて ー 接続と出力ポートディレイ



ステレオ入力を含む入力チャンネルは、XLR入力端子（バランス）と高性能マイクプリアンプを装備しています。

2TR OUT DIGITAL端子；16基のアナログOMNI OUT端子に加え、1基のデジタル出力端子（AES/EBUフォーマット）を装備しています。このデジタル出力端子は1基で2チャンネル分の信号を出力します。

REMOTE端子；外部ヘッドアンプ（YAMAHA AD8HRなど）をコントロールするためのリモートコントロール信号を送受信する端子です。

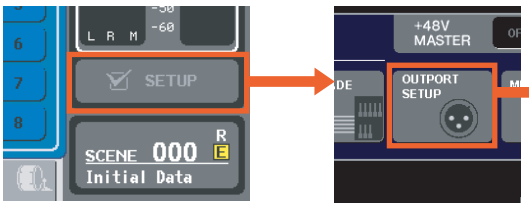
WORD CLOCK端子；オーディオ信号では同期しない外部デジタル機器との間で、ワードクロック信号を送受信するための端子です。

MIDI端子；外部MIDI機器との間で、MIDIプログラムチェンジまたはMIDIコントロールチェンジ信号を送受信するための端子です。

NETWORK端子；Studio Manager/M7CL Editorを起動しているコンピューターとの接続に使用するETHERNET端子です。

OMNI OUT端子；自由にチャンネルに割り当てられる16基のアナログ出力端子です。MIXチャンネルやMATRIXチャンネルに割り当てたり、モニター信号の出力先、ダイレクトアウトの出力先としても使用できます。インサートセンドとしては使用できません。

各出力は、（SLOTと2TR OUTを含めて）OUTPUT PORTポップアップウィンドウでディレイ、フェーズ、アッテネーション量を調節できます。SETUPページの[OUTPORT SETUP]ボタンを押して、OUTPUT PORTポップアップウィンドウを開きます。

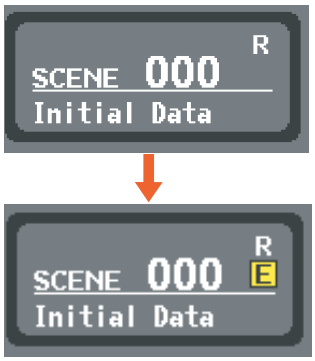


この画面は出力パッチの状態を確認するのに便利です。

エンコーダーを押しながら回すと、より細かいステップ（数値幅）でパラメーターを変更できます。

シーンを使用する：
シーンを保存する / 呼び出す

M7CLでは、300のシーンをメモリーしておくことができます。この300のシーンメモリーに加え、デフォルト設定が記憶されているシーン000（読み込み専用）と現在のコンソール設定をあわせて、計302のシーンを使用できます。これらのシーンは、特別なバッファーメモリーに保存されています。電源トラブルで突然シャットダウンした場合でも、バッファーメモリー内の保存内容は消えません。



シーン000は読み込み専用です。シーン内容が変更されると、黄色い E （Edit）マークが表示されます。

パラメーターの変更が終了したら、SCENE MEMORY[▲]/[▼]キーを押して、保存先のシーン番号を選択します。

選択したシーン番号が点滅します。次に[STORE]キーを押すと、SCENE STOREポップアップウィンドウが表示されます。このポップアップウィンドウでシーンにタイトルやコメントをつけることができます。

SCENE STOREポップアップウィンドウ内の[STORE]ボタン、またはトップパネルの[STORE]キーを押すと、現在の設定がシーンに保存されます。シーン番号がファンクションアクセスエリア内のSCENEフィールドに表示され、E マークが消えます。

シーンを呼び出すには、SCENE MEMORY[▲]/[▼]キーを押して、呼び出したいシーンの番号を選択します。[RECALL]キーを押すと、コンソールの設定が呼び出したシーンの設定に切り替わります。設定がまったく保存されていない「空シーン」は呼び出せません。コンソール設定を初期状態にするには、シーン000を呼び出してください。

ファンクションアクセスエリア内のSCENEフィールドを押すと、SCENE LISTが表示されます。このリストを使用すれば、シーンの保存 / 呼び出しはもちろんのこと、シーンのカット / コピー / インサート / クリア / ペーストを行うことができ、シーンリストを簡単に作成できます。

SCENE フィールド

シーンを使用する：
シーンについて

シーンリコールで呼び出される設定

- **ヘッドアンプの設定**（レベル、ファンタム電源、フェーズ）
- **チャンネル名 / アイコン**
- **ルーティング**（入力、出力、インサートイン / アウト、ダイレクトアウト、モニター出力、カスケード、バーチャルラック）
- **インサートの設定**（オン / オフ、位置）
- **ダイレクトアウトの設定**（オン / オフ、位置、レベル）
- **EQ の設定**（HPF を含むすべてのパラメーター）
- **ATT**（デジタルアッテネーター）
- **ダイナミクス 1 の設定**（すべてのパラメーター）
- **ダイナミクス 2 の設定**（すべてのパラメーター）
- **MIX センドの設定**（バス、オン / オフ、レベル、プリ / ポスト）
- **パン / バランスの設定**（ステレオ / モノラル /LCR）
- **DCA グループの設定**（割り当て、レベル）
- **MUTE グループの設定**（割り当て、オン / オフ）
- **フェーダー位置**
- **ラックの設定**（すべてのパラメーター）
- **リアパネルのインプットと TALKBACK 間のルーティング**（MONITOR ページでの TALKBACK IN レベル設定）
- **フォーカス機能**
- **フェード機能**（オン、フェードタイム）

シーンリコールで呼び出されない設定

- **ユーザー定義キー**
- **プリファレンス設定**
- **MONITOR LEVEL ノブの設定**
- **PHONES LEVEL ノブの設定**
- **TALKBACK LEVEL ノブの設定**
- **タッチスクリーン /LED/ ランプの輝度設定**
- **OUTPORT 設定**（ルーティングを除く）
- **MIDI 設定**
- **ワードクロックの設定**
- **ファンタムマスター電源の設定**
- **CUE ポップアップウィンドウ内の設定**（PFL 入力トリム、DCA トリム、PFL 出力トリム）
- **MONITOR ポップアップウィンドウ内の設定**（レベル、モニターソース、モノラルモニター、リンク）
- **オシレーターの設定**（すべてのパラメーター）
- **ミュートセーフ / リコールセーフ機能の設定**
- **パスワード**
- **スクリーンページまたはポップアップウィンドウ**
- **SENDS ON FADERS モードの設定**（オン / オフおよび対象チャンネル）
- **メーターポイント設定**
- **外部ヘッドアンプのスロット入力割り当て**

シーンを保存すると、上記「シーンリコールで呼び出される設定」の項目がシーンメモリーに保存されます。

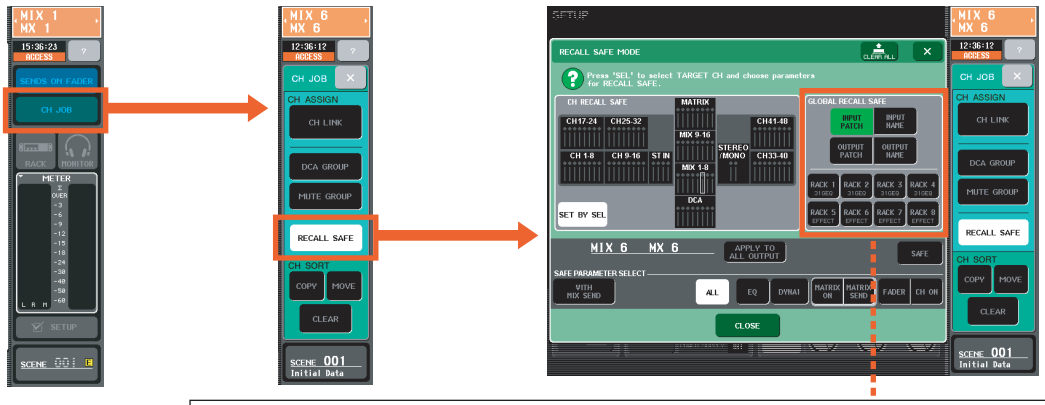
上記「シーンリコールで呼び出されない設定」の項目（ノブ設定以外）はグローバルメモリーに保存されますが、シーンリコール時には呼び出されません。これら項目はコンソールの電源オフ時に記憶され、電源オン時に呼び出されます。

シーンを呼び出す際に、特定のパラメーターだけを呼び出さないように設定できます。これを「リコールセーフ」と呼びます。ファンクションアクセスエリア内の [CH JOB] ボタンから、RECALL SAFE MODE ポップアップウィンドウを開いてリコールセーフ機能を設定します。

M7CLでは、シーン000（読み込み専用）、300のユーザー設定シーン、現在使用中のシーンを合わせて、計302のシーンを使用することができます。

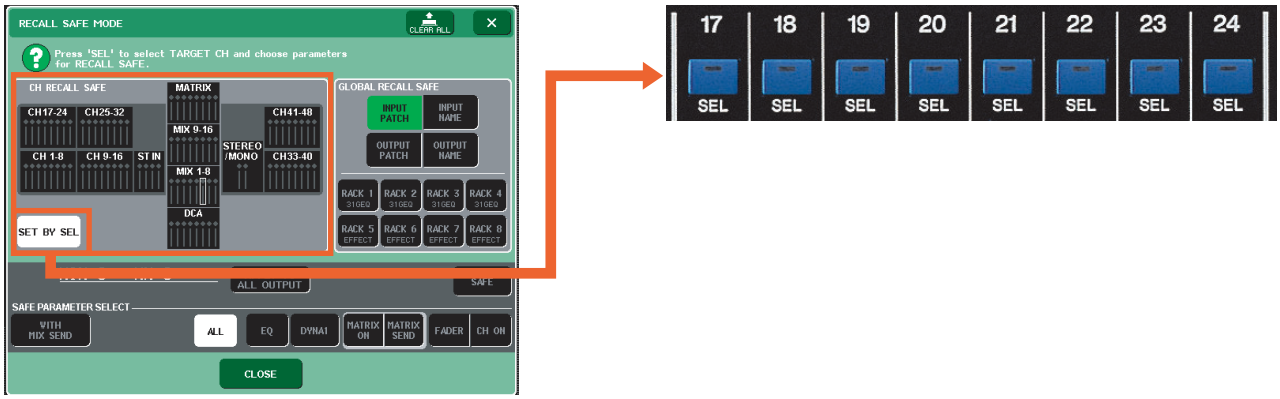
シーンを使用する：
リコールセーフ機能

シーンリコール時に、特定のチャンネル / パラメーターを呼び出さないように設定できます（リコールセーフ機能）。[CH JOB] ボタン、[RECALL SAFE] ボタンの順に押していき、RECALL SAFE MODE ポップアップウィンドウでリコールセーフ機能を設定します。リコールセーフ機能は、シーン 000 を含むすべてのシーンに対して有効になります。



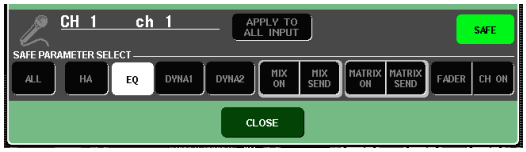
[GLOBAL RECALL SAFE]ボタンを押して、リコールセーフに設定するグローバルパラメーター（チャンネル固有ではなくミックス全体に関わるパラメーター）を選択します。これらのパラメーターはリコールセーフ設定後でも編集することは可能です。**緑色** に点灯しているパラメーターはリコールセーフがオンになっています。**黒色** のパラメーターは呼び出しが可能なパラメーターです。

特定のチャンネルを呼び出さないように設定するには、[SET BY SEL] ボタンを押して、任意のチャンネルの [SEL] キーを押して、[SAFE] ボタンを押します。リコールセーフがオンに設定されているチャンネルは **緑色** でハイライト表示されます。
また、チャンネルの特定のパラメーターをリコールセーフの対象にすることもできます（例：ギターチャンネルの EQ 設定のみ）。これを「パーシャルセーフ」と呼びます。パーシャルセーフが設定されているチャンネルは **青色** でハイライト表示されます。パーシャルセーフについても、さまざまな設定オプションがあります。

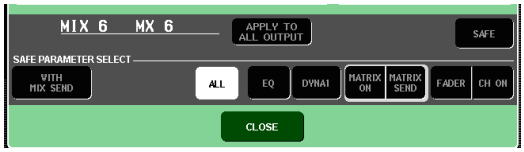


RECALL SAFE MODE ポップアップウィンドウでは、以下の手順でパーシャルセーフを設定します。
まず設定するチャンネルを選択します。次にポップアップウィンドウ下部のパーシャルセーフメニューから、パーシャルセーフの対象となるパラメーターを選択します。[ALL] ボタンがハイライト表示から黒色の表示に変わります。パーシャルセーフをすべてのチャンネルの同じパラメーターに設定するには、メニューからパラメーターを選択する前に [APPLY TO ALL INPUT] または [APPLY TO ALL OUTPUT] ボタンを押します。

パーシャルセーフメニュー（入力チャンネル）

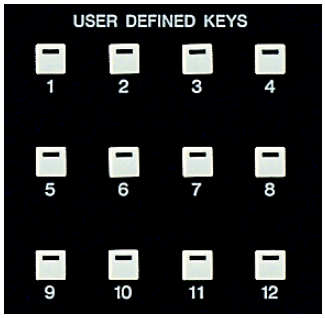


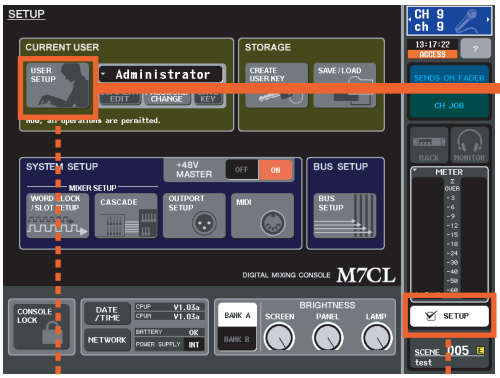
パーシャルセーフメニュー（出力チャンネル）



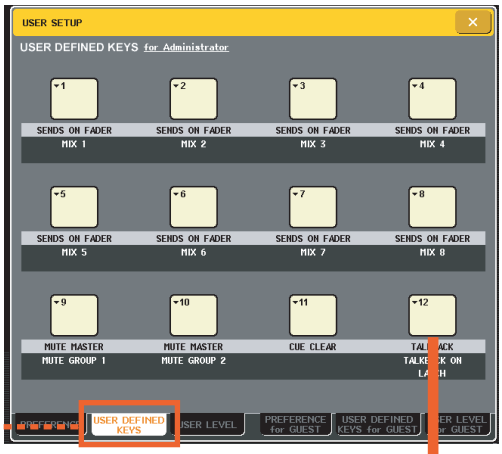
ユーザー定義キーの割り当て

M7CLには機能を自由に割り当てられる、12個のユーザー定義キーがあります。ユーザー定義キーに機能を割り当てておけば、タッチスクリーン上のボタンやその他の動作をユーザー定義キーを押すだけで実行できます。ユーザー定義キーにはあらかじめ機能が割り当てられていますが、SETUPページでユーザーの好みに合わせた割り当てが可能です。



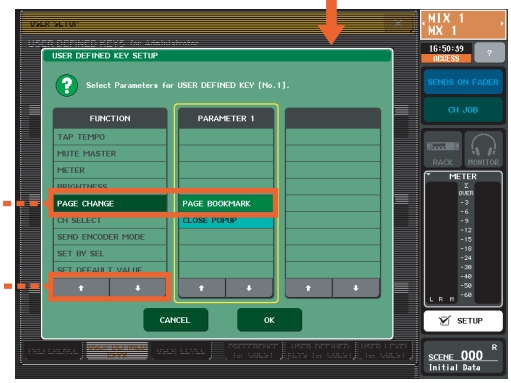


あらかじめ割り当てられている機能が表示されます。



ファンクションアクセスエリア内の[SETUP]ボタンを押して、USER SETUPポップアップウィンドウを開きます。次に[USER SETUP]ボタンを押して、USER SETUPポップアップウィンドウを開きます。開いたポップアップウィンドウでUSER DEFINED KEYSページが表示されていない場合は、ポップアップウィンドウ下部のタブを押して、USER DEFINED KEYSページを表示させます。

キーに割り当てられている機能を変更するには、変更したいキーを押してUSER DEFINED KEY SETUPポップアップウィンドウを開きます。



特定の画面を記憶させるには、PARAMETER 1で[PAGE CHANGE]を、PARAMETER 2で[PAGE BOOKMARK]を選択します。

タッチスクリーン上の[↑]/[↓]ボタンまたは中央ディスプレイ下のマルチファンクションエンコーダーでFUNCTIONリストをスクロールして、割り当てたい機能を選択します。PARAMETER 1またはPARAMETER 2リストに移動するには、マルチファンクションエンコーダーを押します。

これでユーザー定義キーを使って、アクセスしたい画面を開くことができるようになりました。実際に画面を記憶させるには、キーを2秒以上押すと、現在選択されている画面をそのキーに記憶させることができます。画面を記憶させてあるキーを押すと、どこからでもその画面に直接アクセスすることが可能です。

トラブルシューティング

ファンタム電源が供給されない。

☞ HA ポップアップウィンドウでファンタム電源（+48V）をオンに切り替えます。ただし SETUP ページでファンタムマスター電源がオフになっていると、HA ポップアップウィンドウでファンタム電源をオンにしても、ファンタム電源は供給されません。またファンタムマスター電源の設定は、シーンリコールの対象ではありません。

AUX センドレベルをエンコーダーで調整しようとしたが、細かく調整できない。
出力ディレイをもっと細かく調整したい。

☞ エンコーダーを押しながら回してみてください。より細かいステップ（調整幅）で調整が可能です。

ナビゲーションキーを押したら画面は切り替わったが、選んだチャンネルのフェーダー設定に切り替わらない。

☞ M7CL では、他のチャンネル / グループを Centralogic™ セクションの操作対象として選んでも、DCA グループのレベル調整だけは Centralogic™ セクションで行いたいなど、ある特定の機能を固定することができます。ナビゲーションキーが点滅するまで押し続けると、そのチャンネル / グループのフェーダー機能がロックされます。この状態で他のナビゲーションキーを押すと、タッチスクリーンの情報のみ切り替わります。解除するには、ナビゲーションキーを再び押し続けます。

シーン 000 をリコールしたが、フェーダーなどの設定がリセットされない。

☞ リコールセーフ機能が設定されていませんか？シーンをリコールしたときに、例えばフェーダーなどの設定がリコールされないように保護されている可能性があります。CH JOB ポップアップウィンドウを開いて、RECALL SAFE ボタンを押すと、リコールセーフ機能の設定を確認できます。リコールセーフをすべて解除して、シーン 000 をリコールしなおしてください。

フェーダーをあげても音が出ない。

☞ SENDS ON FADER モードになっていませんか？SENDS ON FADER モード中は、入力チャンネルフェーダーは各チャンネルのマスターレベルではなく、AUX センドレベルを調整するようになります。現在のモードを確認するには、[SEL] キーの LED を確認します。SENDS ONE FADER モード時は選択したチャンネル以外のチャンネルの [SEL] キーがすべて点灯し、通常モード時は選択チャンネルの [SEL] キーのみが点灯します。

☞ 操作したいチャンネル以外のチャンネルを選んでいたり、パッチングを変更したりしていませんか？もう一度、入出力パッチとチャンネル名 / 番号を確認してください。

出力のディレイタイムはどこで設定するのかわからない。

☞ SETUP ページ内の OUTPORT SETUP ボタンを押して、OUTPORT SETUP ポップアップウィンドウを開きます。出力ポートのディレイタイムはここで設定できます。

設定を何回も確認したが、Studio Manager で「ポート設定が違っている」という内容のエラーが出る。コンピューターは正しく接続されている。

☞ M7CL とコンピューターとの接続には CAT-5 クロスケーブルを使用してください。コンピューターによってはこの問題を自動的に解決する場合があります。

より詳しい情報をお求めの場合は･･･

☞ 下記のウェブサイト（ヤマハマニュアルライブラリー）から取扱説明書の PDF データをダウンロードできます。
http://www.yamaha.co.jp/manual/japan/result.php?div_code=pa&model=M7CL&cat_code=&div_code=pa